

与論島における 死をめぐる人類学的考察 「適寿」という用語について

The Matter of Death in Yoron Island as Viewed from the Standpoint
of Anthropology: Proposition of the Term "Appropriate Age"
in Studies of Longevity Advances in Aging

近藤功行

緒言

①研究背景

②「適寿」という用語について

まとめ

【論文要旨】

本研究では、これまでの与論島を中心とした琉球文化圏における筆者のフィールドワークを発展させて、現在用語構築を模索して概観する。本用語は長寿科学研究における新たな用語として提言したいものである。筆者は琉球文化圏における長寿科学研究をとおして、社会・文化的要因の解明に努めてきた。そのプロセスや現在携わる医療福祉教育を通して、今後のわが国の長寿科学研究には「長寿」や「死生観」「QOL」といった概念を統合した形での「適寿」の必要性を感じた。そこで、これまでの筆者の研究結果や学生へのアンケートから「適寿」について考察し、今後の長寿科学研究を見据える材料として提示してみる。

キーワード：適寿，死生観，長寿，長寿科学研究，QOL，精神性

緒言

「人間、長生きしたい」という願望は医・科学の発展によって叶えられつつあり、これからは「長生きして良かった」という環境を創造する在宅ケアの充実に向けた諸策が進展している。筆者は1986年から鹿児島県大島郡与論町の「死」をめぐる調査研究に着手し、与論町住民の「死」の場所在「自宅死亡」であることを立証し、その要因の検討をはかってきた。

終(ついで)の場所在必ず自宅となる地域住民の死生観・遺体観など様々な調査研究からは、与論島住民の「自宅死亡」が全国的にみても特異的であり、極めて希な自治体であることが判明したが、島内での病院の開業(表1)、あるいは火葬場設置に関する意見など、環境の変化が死亡場所に少なからず影響しつつあることも指摘される。筆者のこれまでの死亡場所の流れを追う調査研究や、

表1 与論島における医療の現況
(1998年8月末日現在：歯科診療の記載は除く)

年	1976	1991	1995	1996
■西田医院(0床)	診療所	移転	閉院	
■バナウル診療所(0床) (所長は、元町立診療所長)	1988.05~1991.01.	19991.01.~	1996	移転
●町立診療所 ¹⁾ (19床)				
●与論町保 ²⁾ 健衛生課				
○保健セン ³⁾ ター				
○地域福祉 ⁴⁾ センター				
■ヨロン医院(19床)	1976			
◆特別養護 老人ホーム ヨロン園(55床)	1976.06.~			
■与論病院(80床)				1996

【往診】 【訪問看護】
1995.09.~

【介護講習会】
1991

【各種検診】【リハビリ指導】
1995.10.~

【サービス】【介護講習会】
(与論町)【ホームヘルプサービス】【ホームヘルパーの訪問】

【ショートステイ】【介護講習会】

【デイケア】【訪問看護】
1996.01.~

註 1) 正式名称は、(与論町立国民健康保険直営診療所)。
2) 鹿児島県立徳之島保健所管轄の日常業務を遂行している。
3) 与論町立診療所の敷地内に併設。保健衛生課の保健婦らが駐在。
4) (社会福祉法人) 与論町社会福祉協議会に委託。在宅福祉の拠点。

地域の死また終末期医療のあり方を考究する題材を求めた一連の研究からは、長寿科学研究につながる視点も見いだすことが可能となった。

そもそも、現在わが国における長寿科学研究においては、遺伝子・栄養学・臨床医学・ライフスタイルなど様々な側面からの調査研究がなされている(図1)⁽¹⁾。また、未来予測調査結果も示唆されている。それ以外に必要と思えるものは、社会・文化的要因の解明に取り組む調査研究である(図2)。筆者は、琉球文化圏における高齢女性の徘徊行動に関する研究や、与論島(鹿児島県大島郡与論町)での死生観に関する調査研究などから、特に必要と思われる視点をまとめた。そして、これらの調査研究を通して、長寿要因の解明に加えて、長寿科学領域における新たな概念・用語の提唱が必要であると考えた。それが、今回紹介する『適寿』^(4・5・6)である。

この用語を提唱するにあたり、ここではこの用語の提唱に至った背景や長寿科学研究における位置づけについて述べ、『適寿』に対するイメージを学生に調査した結果を加えて、本用語について考察する。

①……………研究背景

沖縄地域における長寿要因の解明に関する研究

現在、沖縄地域における長寿要因の解明に関する研究には以下のようなものがある(図1)⁽⁷⁾。

- (1) 戸籍などを含む保健統計学的データの信頼性の検討。
- (2) 温暖な気候が呼吸器系・循環器系に及ぼす効果と紫外線の影響。
- (3) 他地域に比べて、特異な食文化・食習慣。沖縄地域では、ブタのほとんどの部分を食しており、豚肉の消費量は日本一である。また、沖縄県は脳卒中・心臓病が全国最下位で、このコラーゲンの摂取が血管壁を強化し、脳卒中の発症率を引き下げていると考えられている。ブタの他にも、沖縄県には脳卒中や心臓病の発症を抑制するような食習慣があり、これらに関する研究が行われている。以下に、その食習慣を簡単に紹介する。①ソーキ(豚の骨つき胸肉)や足テイビチ(豚足)などの豚料理、②山羊肉の摂取、③黒砂糖の使用、④昆布・モズクの摂取、⑤紅芋やサツマイモ(今

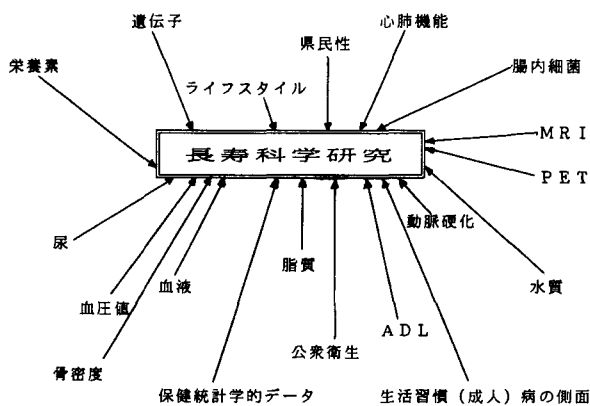


図1 これまでの長寿科学研究について

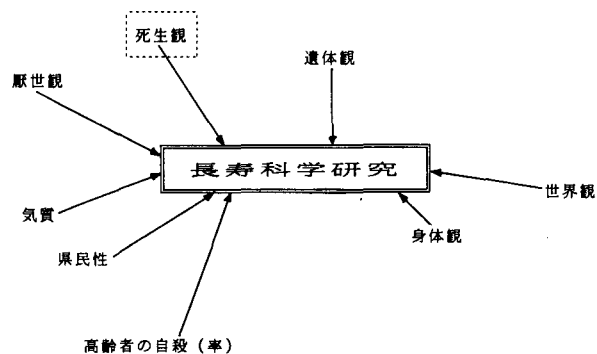


図2 さらに研究の必要な長寿科学研究の側面

の高齢者の場合、葉から茎、根すべてを含む)の摂取、⑥ゴーヤーの摂取、⑦緑黄色野菜(ヨモギ・ニガナ・ウイキョウ・サクナなど)の摂取、⑧少ない塩分摂取量、⑨チャンプルー料理、⑩豆腐の摂取、⑪食習慣に加え、硬質の水(飲料水。また、この水は農作物が吸収している成分でもある)。

(4) 労働(運動)と休息の関連性。この地域では、サトウキビ栽培を伝統とした農作業を行っている。この作業が心肺機能を高め、長寿につながっているのではないかと考えられている。長寿をめぐる健康調査からは、食事・睡眠・運動の影響が大きいことが明らかになっており、大宜味村での健康調査でも、高齢者は農作業など汗をかく労作を行うと同時に適度な午睡による休息、労作後のシャワー浴の習慣がみられた。

(5) 精神的健康に関する研究。沖縄には、ユイマールと呼ばれる相互扶助精神の強いシマ社会とそこに繰り広げられる共同体社会がある。また、「くよくよ思い悩むな。もっと気楽に考えなさい。」という「テーゲー主義」と呼ばれる県民気質が存在している。そして、自分の生まれ育った土地(家)や沖縄(ウチナー)へのこだわりがある。また、高齢者にも役割が期待されており、“老い”とは無縁な現役での仕事ぶりがみられる。隠居制度がないのが沖縄社会(琉球文化)の特徴であり、ここに高齢者が尊重され、必要とされる地域性が存在している。

(6) 公衆衛生に関する研究。この地域では、介輔制度(医介輔・歯科介輔)が存続し、本土復帰前のアメリカの保健医療行政による離島・僻地でのプライマリーケアが充実している。

中でも、筆者は以下のような内容に力点をおいて継続した取り組みを進めてきた。

(A) 沖縄地域における長寿要因の検討をはかる厚生科学研究(厚生省長寿科学研究事業)の研究グループでの分担研究[研究代表者:琉球大学医学部 崎原盛造教授]^(8・9・10)。

(B) 沖縄本島並びに周辺離島および奄美群島全域の特別養護老人ホーム(奄美群島では養護老人ホームなども含む)をまわって高齢女性の一過性の徘徊行動の存在を調査した結果、1997年現在でも旧暦1日・15日頃になるとこの行動を呈する高齢女性の存在が確認された。この証左は、祭祀儀礼を担う女性が「火(台所)の神様(ヒヌカン)」に向かって一家の無事や家族の繁栄を祈る人生のなかで続けてきた行為がある時期に断たれておこる葛藤の現れであった。すなわち、長い間の期間をかけて体得してきたものが、特別養護老人ホーム入園という出来事でもって崩れることからくる不共和音の表出と推測される^(11・12)(図3)。

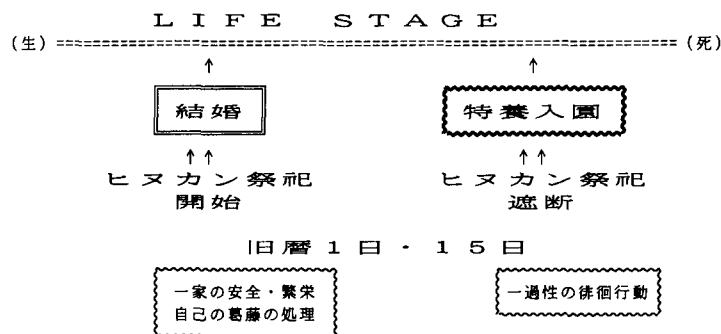


図3 沖縄島内における施設入所の高齢女性にみられる一過性の徘徊行動の背景

これらの調査研究を通して、筆者らは長寿要因の中でも、(1)健康に及ぼす気候の影響、(2)社会関係と長寿の関連性、(3)精神的健康度について、取り組んできた。つまり、本長寿科学研究[研究代表者：崎原盛造琉球大学医学部教授]は、沖縄における長寿要因解明に関する研究では最も遅れている社会文化的環境や文化的側面との関連について探求し、次の事項について解明を試みたのである。1) 温暖な気候のもたらす健康へのプラスとマイナスの影響を明らかにすること。2) 伝統的な地域共同体における社会関係の分析を通して、ソーシャル・サポート・システムを明らかにすること。3) 風土としての文化的側面(宗教儀礼、生き方など)から精神的健康度を明らかにすること。以上の1)～3)の研究結果に基づいて長寿との関連を総合的に検討した。

(C) QOL (Quality of life) の側面。筆者はこれまでQOLの研究を通して「生」と「死」の側面を見据えてきた。QOLは定着した用語であるが、QOLのLすなわち「Life」には多岐にわたる意味があり、翻訳次第では2つのグループに分かれると筆者はとらえている^(13・14)。つまり、QOLとは《生活の質》と《生命の質》の両者である。《生活の質》の方は、「今があって無限の将来を考えた上で、現在の質をいかにあげるか。先が無限にあるから、自分や他人の命は把握できない。今の生活や今を大切にしよう。」という側面が強い。ここで述べた「無限の将来」とは、「人間はいつ死ぬかということが決められていないから無限に生きて行ける」という想定で述べた内容である。一方、《生命の質》の方は、「命には限りがあり、そして終わりがある。終わりまでをいかに充実させるか」ということは、充実した過去を積み上げていくこと。現在を充実させるのではなく、過去を評価していかに過去が充実しているかを知ること」という側面が強い。今いる自分がいて、昔の自分自身について思いだした出来事が過去であり、それについて充実していたか、満足できているかということである。それを自分で確かめることができれば、これから先のことに對しても安心して生きていける。

このように、人間の一生をみていく時にこのQOLという用語のもつ意味あいは大切な内容をはらんでいるのではないと思われる。QOLについての理解は、長寿科学研究でも重要である。

(D) 長寿科学研究における新たな概念

長寿科学研究は、既に研究者の間では「長寿研究自体は頭うちになるのではないか」ともささやかれている。「高齢者人口が増加するなかで、少ない若者がこれからの社会を支えて行かなくてはならない」ということは一般の常識になっている。口や鼻、腹部やお尻に管を通され、口さえも利けないまま終末を迎えることになる医療行為の状態を俗に《スパゲッティ症候群》と言うが、このような医療行為により増大する医療費は現在の問題でもある。老人医療費が財政を圧迫する中で、痴呆性老人の数は今後ますます増大することが予想される。今までの充実した人生が痴呆症になることによって、すべてを無に帰してしまう。このようなことになれば、今後は単なる《長寿》ではなく、新たに生きることの意義を考究していかなければならない必要の迫られた時代になっていると言えるのではなかろうか。尊厳をもって死ぬことの必要性がうたわれはじめている現在の《長寿》は、言いかえれば「いかに生かすか」という点にある。そもそも長寿科学研究そのものは、「いかに長く生きるか」「何故、長く生きて来たのか」という視点が強かった。人間には寿命がある。「ほど良く生きて、ほど良く死ぬ」ことが望ましい。では、このようなことを問えるような、新たな概念規定(用語)は用意できないのであろうか。

②……………『適寿』という用語について

筆者の用意している概念規定（用語）をここで紹介してみる。それは、冒頭で紹介した『適寿』という用語である。この『適寿』を英語で表記すれば、“Appropriate age”。「appropriate」には、「適切な、ふさわしい」といった意味がある。『『適寿』がどのようにして保たれているか』など、この視点からのアプローチが出来れば、今後の学問にも寄与して来るのではなかろうか。これは、先に述べた（D）につながる内容でもある。ただ、この『適寿』構築に際してはすでに関門もでている。筆者が述べてきた『適寿』という概念の構築に関し、ある医科大学の名誉教授からコメントを頂いた。

「（中略）『適寿』の『適』は何を基準において『適』とすべきか甚だ難しく、小生にはピンと来ません。否、christianである小生のこだわりかも知れませんが、人（生物すべてといってもよいかと思いますが）の寿命は天から決められたもので、長命・短命を問わずすべて《天寿》であり、人のcontrolすべきものではないという暗黙の、しかし、判然とした認識がありますために、『適寿』という語句そのものに違和感さえ覚えます。一方で、“人間としての尊厳を保つために有意義な生を全うし、有意義な死を受容する”という理念はよく理解出来ます。先生のお考えは多分これに近いものと思うのですが、それは『適寿』という語句からはimageされて来ないのですが、…。（後略）」。

筆者自身はchristianではないが、ただこの宗教心のないことは、学問の構築に際して先入観をなくして取り組めるのではなかろうか。例えば、筆者は『死生学（サナトロジー）』を構築する視点に関しても扱っているのだが、日本における今日までの『死生学』そのものの発展にはchristianである学者による多大な貢献があったことは特筆すべきことである。そもそも、『死生学』の構築そのものは「よりよく生きるため」のものに他ならない。大学・短大・専門学校教育等においても、『生と死』『ターミナルケア論』など生と死を考究していく学問が増えてきている。このような中、人の「生」や「死」を考究していく学問あるいは長寿研究においても、宗教的な立場を離れた目である事象をみつめていく視点は必要であろう。

「尊厳をもって生きられる限界がある」ということを《天命》と呼ぶ人もいると思う。ただ、これを『適寿』と表現することも可能ではなかろうか。《天命》ということば自体には、“神の存在”が見え隠れする。『物理学』自体が、“神の存在”が大きいことについては論究を避けるが、筆者が用意している『適寿』という用語には“神の影”は近づいていない。長寿科学研究の延長線上に「尊厳をもって生きられる限界」という視点を加えて、『適寿』として提言したい。

『適寿』という用語を確立する上で、専門学校介護福祉科1年生に、この用語についての感想を求めた。同様に、『適寿』の視点について、K医療短期大学第一看護科1年生に、この用語の概念に関する質問をしたところ、様々な回答が返ってきた。ここで、いくつかの記述を紹介しておく。

まず、「自然な・自然に」という表現で表されたものには、「一番人間にとって自然な死」「自然にまかせて生きて死ぬこと」「自然に近いその人らしい死に方」、などの意見があった。

「人間らしさ」という表現では、「人間らしく機械につながられないで生きられる範囲」「人間らし

適寿 ≠ 長寿 (適寿 = 「人間らしく生きられる期間」)

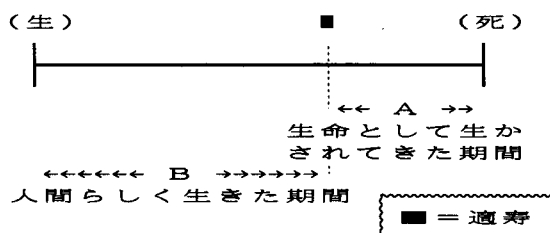


図4 ライフステージと《適寿》

く生きられる限界」があった。与論島の事例をあげたものでは、与論島のような地域、などを含めて他にもいくつかの記述があった。ライフステージに関連した表現では、「危篤になった時には死ぬということ」「平均寿命くらいで死ぬこと」「ある程度の年齢に達した人のこと」「生きるところまで生きたということ」、などの意見があった。

《天命》と解釈するものもあった。「よく生きるという限界ではなく《天命》」。

well-being, well-aging, well-dying の視点⁽¹⁶⁾につながるような内容には、「人それぞれにある無理のない寿命」「人間が尊厳をもって生きること」「自分を取り巻いているあらゆるものの環境がよく、長く生き続けることができること」「自分が死にたいと思いだした時」「ほどよく生きてほどよく死ぬこと」「後悔のないように生き満足できる人生を十分に生きることができたと思えること」「悔いを残しながらも死ぬこと」「自分で納得いくまで生きてそれで死ぬこと」「延命装置を使用してまで生きたいという人」、などをあげることができる。

また、「自殺」の記述もあった。

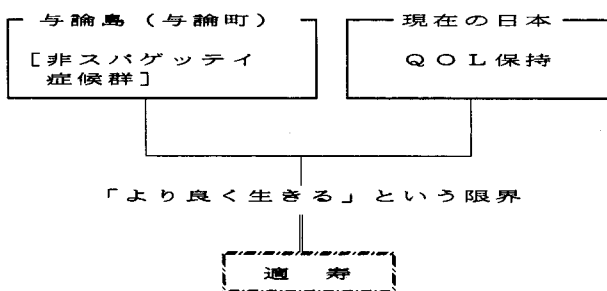


図5 長寿科学を見据える用語の確立

以上のように、短期大学1年生への講義の結果、様々な意見が収集できた。これらの意見を集約すると、「《長寿》 = 『適寿』」とする意見と、「《長寿》 ≠ 『適寿』」とする意見の2つに別れた。この意見に関連する内容では図4のように、「Aゾーン中で死ぬことも、Bゾーン中で死ぬことも『適寿』にはあたらず、この接点で死ぬことが『適寿』ではないか」という意見もあった(=医療福祉系大学2年担当ゼミナール学生のグループ学習より)。A = 生命として生かされてきた期間、B = 人間らしく生きた期間、とすれば、この図は「《長寿》を達成することによって、『適寿』を満足させる医療としての瞬間がある」ことを示す内容である。

5) 適寿とQOLの側面

QOLのより良いレベルで生きることは大切である。「QOLの高いレベルで生きるということ」「QOLの高い生活、満足のゆく人生を送り安らかに死ぬこと」「長命と短命に関わらず自分にあったQOLで生活し生命を終えること」。この「よく生きる」という限界が『適寿』と言えはしないだろうか。QOLを数量(計量)化する試みはすでに多方面で進められているが、これを明確にすること自体は宗教的立場からはさらに認められにくいのではなからうか。QOLを保つということの延長に延命治療があるとすれば、このQOLを無視して寿命を長らえるということはどう考えればよいのか。今後、このような視点を解決する上では地域調査から何らかの回答が得られるかもしれない。例えば、筆者の調査研究の対象地である与論島での死のあり方は、見方を変えれば、表現は粗いが「最後まで生きている」ということになる。反面、見方を変えれば体じゅうに管を通され

口も聞けないような〈スパゲッティ症候群〉にならないようにして自宅で死を迎えているという地域性は『伝統的適寿』となっているとも言える(図5)。前者の言い方では『適寿』が活かされていない(QOLが保てない)ということであるかもしれない。ただ、この場合どちらを選べばよいのであろうか。

まとめ

今日の長寿科学研究そのものは、『適寿』を考える視座をはらんでいると思う。筆者が継続的な琉球文化圏での長寿科学研究に関わる機会を得たなかで、筆者は現在の《長寿》研究の延長線上の視座を模索している(図6)。

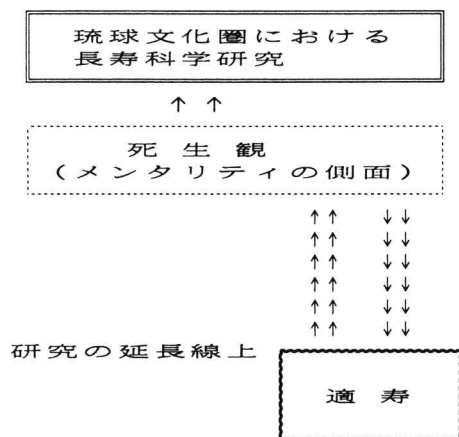
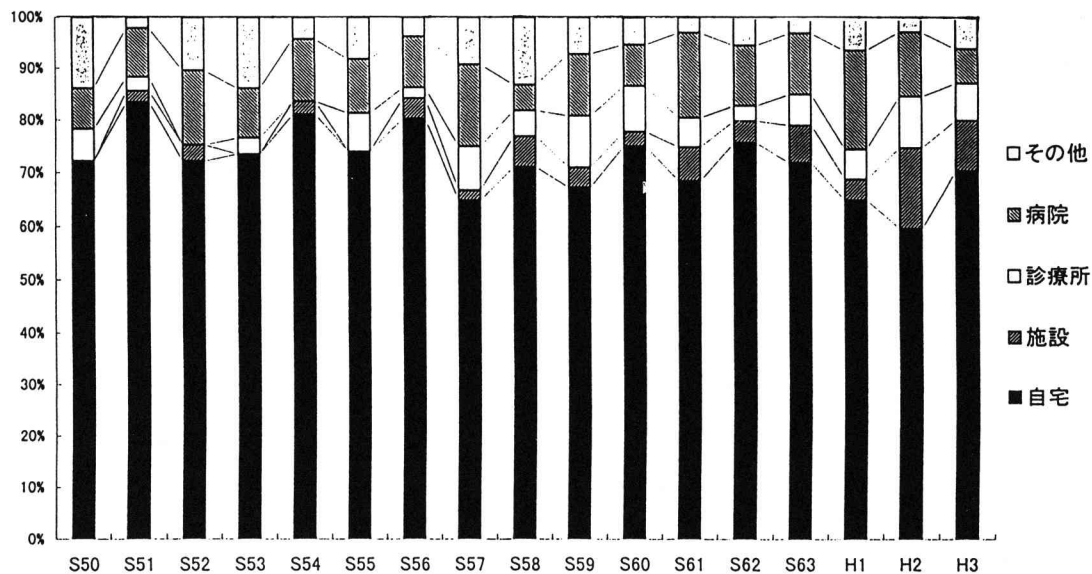


図6 《適寿》を考える視座

与論島における調査が10年目を経過した筆者にとって、長寿要因の解明とは異なるこの『適寿』の視点が新たな課題である。自宅で死を迎えている人々がほとんどという自治体(1島1町)であることを立証できた与論島において(図7)、さらに『適寿』の視点を打ち出すだけの材料があるのだろうか。「自宅で死を迎える与論島の人々がこの『適寿』の側面に関してどう思っているのか。」「スパゲッティ症候群になることを嫌うことを与論島では何と表現しているのか。」「自宅で死を迎えることを与論島では何というのか



本調査は法務省申請(鹿児島地方務局宛に)後に、昭和63年12月期、閲覧調査(鹿児島地方務局名瀬支局で「死亡届」「死亡診断書」1,000件を筆記)した結果内容の紹介である。このため、自宅死亡が優位である現状は平成3年までのデータ紹介に留まっているが、平成12年現在においても、自宅死亡が優位であることに変化はない。

図7 与論島における自宅死亡の現状 各年別にみた死亡場所の割合(近藤功行調査による)

(与論島のことばで)。「畳の上で死を迎えると言っているが、そもそも与論島に昔は畳はない。その時に何と言っていたのか。」「適寿」に相当する概念が、価値のある生活習慣がいきづいている与論島には存在したのではないか。それを探ることがどこまで可能か。現在、多角的な検討を行っている。⁽¹⁷⁻¹⁸⁾

そもそも、「適寿」という用語を確立する意図は、人生の価値追求に向けてその意義を模索することでもある。同様な研究の側面をみると、海外においては、

Rowe JW と Kahn RL (1997) が提唱している「Successful Aging」がある。⁽¹⁹⁾ 国内では、前述の鈴木の研究に加え、秋坂の研究結果が大きい。^(20・21・22)

《長寿》《量寿》《質寿》「適寿」といった人生の価値追求に向けての用語を用意することは、今後の社会生活を位置づける上でも不可欠ではなからうか。《健寿》という言い方も紹介できる(図8)。

今後、筆者の提唱する「適寿」ということばが定着できるかどうかはわからない。筆者なりのまとめをしておけば、「適寿」とは、「(高齢者を)支えるシステムが個人に集中せず、高齢者を介護する人々のQOLについても考える必要がある。」と、締めくくることが可能である。^(23・24・25)

最後に、本研究を「適寿 (Appropriate age) 論」としてまとめる。

Life との関わりの中で寿命を考えるとということで、生命としての寿命、生存としての寿命、生活としての寿命などの問題が、一括してQOL (Quality of life) に集約されてきたのが、ここ数十年の経緯である。^(26・27) その中で、「適寿」と世間の認知を得るには、自分自身の生活の中で満足がいくという人生の区切り、あるいは一歩(歩幅は相当大きい)進んで、自分自身が生活している環境の中で、他者を通して自分が満足できる人生の区切り、といった理解が得られることが問われるであろう。前述した《天寿》を全うしたという理解は、自分の満足とは違うところでの他者の理解に他ならない。《天寿》は《長寿》であったことは事実であろうが、決して、長生きしたから《長寿》を全うしたとは言えないことは明らかである。このように考えて行くと、自分の使命は終わったとして人生に区切りをつける行為に対する論点、あの人の人生は終わったとして区切りをつけさせる行為への論点、の2つは人間行動と人生観の関わりをもつものであり、これを普遍化すると文化論争に発展するであろう。それゆえ、われわれ基礎的な学問を行うものにとっては、観察・収集できる資料を蓄積することが問われるのである。

付記：本研究内容は、厚生省厚生科学研究(長寿科学研究事業) 崎原盛造研究班(崎原盛造琉球大学医学部教授)の分担研究を土台としたこれまでの基盤研究を発展させ、将来の長寿科学研究を模索する視点を加味して執筆したものである。沖縄班の本長寿科学研究は、その後、書籍化に至っている(柗山幸志郎琉球大学医学部第3内科学講座教授・医学部長〈監修・編集〉)。医療・保健・

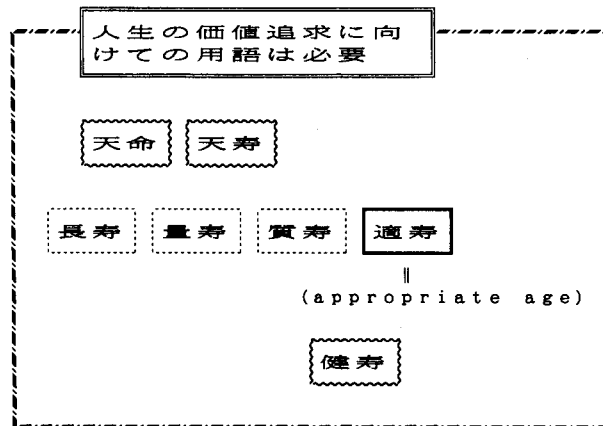


図8 《適寿》という用語の確立

福祉を包括した『医療福祉学』を学ぶ大学が増えてきたが、学生教育の中で、QOL教育を進展させ長寿科学研究を述べる視点を教示することは可能であろう。その手法として、文化人類学・人類生態学 (Human ecology) 的参与観察を伴ったフィールドワークは新知見 (new finding) を生むことがあるのである。1986年8月期に着手した与論島における死者儀礼に関わる調査研究やその後の在宅死亡の立証や要因解明に向けた一連の作業は1つの新知見でもあった。

参考文献

- (1) 鈴木 信 (1985) : 百歳の科学, 全248, 新潮社
- (2) 近藤功行 (1991) : しぬ—生きることと死ぬこと—, ライフロングソシオロジー (山本慶裕・元田州彦, 編著), 207-239, 245-246, 東海大学出版会
- (3) 近藤功行 (1994) : 南島における死—週末行動と死者儀礼を中心に—, 沖縄の人と心 (沖縄心理学会編), 22-27, 九州大学出版会
- (4) 近藤功行 (1997) : 島嶼地域における老いと死にゆく場所, 第29回中国・四国学校保健学会講演集, 28-29, 中国・四国学校保健学会
- (5) 近藤功行 (1997) : 21世紀に向けての学校健康教育の最構築 (5) —「死生学」を学ぶ立場から—, 学校保健研究 39 (5), 455, 日本学校保健学会
- (6) 近藤功行・當銘貴世美・崎原盛造 (1997 a) : 長寿研究の将来性を探る—「適寿」の概念は可能か—, 民族衛生 63 (Suppl.), 50-51, 日本民族衛生学会
- (7) 近藤功行 (1997) : 長寿と社会文化的環境—琉球文化圏における人類生態学的アプローチ—, ケア サイエンス リサーチ care science research 3 (1), 43-56, 旭川荘厚生専門学院 (岡山市)
- (8) 近藤功行 (1997) : 琉球文化圏における長寿要因をめぐる調査研究—高齢女性の役割期待と精神生活の側面並びに与論島住民の終末行動から得られた死生観の側面を通して—, 沖縄の気候・風土と長寿に関する研究, 平成8年度厚生省厚生科学研究 (長寿科学研究事業) 研究成果報告書 (崎原盛造研究班), 67-76, 琉球大学医学部 (沖縄コロニー印刷)
- (9) 近藤功行 (1997) : 琉球文化圏における長寿要因をめぐる調査研究—高齢女性の役割期待と精神生活の側面並びに与論島住民の終末行動から得られた死生観の側面を通して—, 沖縄の気候・風土と長寿に関する研究, 厚生省厚生科学研究費補助金長寿科学研究平成8年度研究報告 Vol.10 沖縄の長寿に着目した研究, 崎原盛造・芳賀博・鈴木征男・尾尻義彦・秋坂真史・Matthew Allen・近藤功行, 231-238, 長寿科学総合研究費中央事務局
- (10) 近藤功行・當銘貴世美・崎原盛造 (1999) : 高齢女性の社会的役割, 長寿の要因—沖縄社会のライフスタイルと疾病—, 終山幸志郎 (監修・編集), 74-80, 九州大学出版会
- (11) 近藤功行 : 死の場所をめぐる公衆衛生・人類生態学的研究—変容する南島文化の現況から—, 平成4・5年度文部省科学研究費補助金特別研究員奨励費研究成果報告書, 全169, 山口大学教養部 (三共印刷)
- (12) 近藤功行 : 沖縄の老人ホームにおける死と儀礼—高齢女性を中心とした調査研究—, 奄美博物館紀要 (2), 名瀬市立奄美博物館, 61-88, 1992
- (13) 近藤功行 (研究代表者) (1996), 他 : 社会福祉・介護福祉教育におけるクオリティ・オブ・ライフの視点—教材研究並びに学生教育への提言—, 平成7年度川崎医療福祉大学プロジェクト研究研究成果報告書, 全166, 川崎医療福祉大学 (吉備ワークホーム)
- (14) 近藤功行・末光茂 : 「QOL」という用語について—医学・看護・福祉教育における視点から—, 介護福祉教育 1 (1), 日本介護福祉教育学会 (中央法規出版), 30-32, 1995
- (15) 近藤功行 (研究代表者) (1997), 他 : 学校教育・社会教育における「死生学 (サナトロジー) の担う役割について—その将来的展望と基礎・学際的研究の試みから—, 平成8年度川崎医療福祉大学プロジェクト研究研究成果報告書, 全388, 川崎医療福祉大学 (吉備ワークホーム)
- (16) 鈴木信 (1997) : disable-free life (心豊かな人生自立) とユイマール, 沖縄の長寿の背景, 388-402
- (17) 近藤功行・當銘貴世美・崎原盛造 (1997) : デイ・ケアを進める上での高齢者の嗜好調査 (与論島) その1—Quantity of Life と Quality of Life の視点から—, 第29回沖縄県公衆衛生学会学術集会抄録集, 50-51, 沖縄県公衆衛生学会

-
- (18)近藤功行 (1997)：高齢者の生と死—与論島における在宅・終末期ケア—, 高齢者教育論 EDUCATIONAL GERNTROGY, 松井政明・山野井敦徳・山本都久 (編), 91-107, 東信堂
- (19)John JW and Kahn RL (1997)：Successful Aging. The Gerontologist 37 (4), 433-440
- (20)秋坂真史 (1995)：気がつけば百歳—南の島, 沖縄の健康長寿から学ぶこと—, 大修館書店, 234
- (21)秋坂真史 (1995)：南西諸島における百歳長寿者とその家族における人生終末期に関する意識構造, 家庭医療 3 (2), 24-27, 家庭医療学研究会
- (22)鈴木信 (1997)：disable-free life (心豊かな人生自立) とユイマール, 沖縄の長寿の背景, 388-402, 沖縄県生活福祉部長寿社会対策室
- (23)近藤功行 (1998)：「適寿」という用語について, ケアサイエンスリサーチ care science research 4 (1), 1-16, 旭川荘厚生専門学院 (岡山市)
- (24)近藤功行 (研究代表者) (1997)：学生教育・社会教育における『死生学 (サナトロジー)』の担う役割について—その将来的展望と基礎・学際的研究の試みから—, 平成8年度川崎医療福祉大学プロジェクト研究費研究成果報告書, 全395, 川崎医療福祉大学 (吉備ワークホーム)
- (25)近藤功行 (1999)：健康という病—健康幻想—, 幸福祈願, 飯島吉晴, 142-168, 筑摩書房 (ちくま新書196)
- (26)近藤功行・末光茂 (1995)：「QOL」という用語について—医学・看護・福祉教育における視点から—, 介護福祉教育 1 (1), 30-32, 日本介護福祉教育学会 (中央法規出版)
- (27)近藤功行 (1996)：看護・医療福祉系学生に対するクオリティ・オブ・ライフの教育, 川崎医療福祉学会誌 6 (2), 291-299, 川崎医療福祉学会

(志學館大学法学部)

(2001年2月28日 審査終了受理)

The Matter of Death in Yoron Island as Viewed from the Standpoint of Anthropology: Proposition of the Term “Appropriate Age” in Studies of Longevity Advances in Aging

KONDO Noriyuki

The author of this paper has done fieldwork in the Ryukyu cultural area centering Yoron Island, and in this paper in expanding the former studies, the term “Appropriate age” is surveyed, which is now under discussion of defining terminology. The author seeks to propose this term as a new terminology in gerontology. His former studies of longevity advances in aging in the Ryukyu cultural area have been done to make clear the social and cultural factors. In the course of the studies and the medical welfare education in which the author is now engaged, it seems necessary for our studies of longevity advances in aging to define the term “Appropriate age” as a term which integrates the concepts of “longevity,” “the matter of life and death,” “QOL,” etc. Upon this, the term “Appropriate age” is considered with the former studies and the questionnaire to the students, and is presented as a material for the future discussion in this study.

key words: appropriate age, life and death conception, longevity advances in aging, Quality of Life, mentality
